

科学 オリンピック だより

「科学オリンピックだより」は国際科学オリンピック（数学、化学、生物学、物理、情報、地学、地理など）と、その国内予選の様をお伝えするとともに、国際科学オリンピックに挑戦する生徒と、生徒をサポートする先生方を応援しています。

2023年度国際科学オリンピック7教科記者説明会
ならびにオリンピックによるトークショー・ダイジェストレポート

科学オリンピックとその先にある未来について語り合う 教科・科目の枠を越えた交流、仲間との再会に沸いた一日



メダルを胸に、2023年度国際科学オリンピック参加報告をした代表選手7名

2023年10月7日、科学技術振興機構（JST）の東京本部別館1Fホールで「2023年度国際科学オリンピック参加報告」と「2020～2022年度日本代表選手たちによるトークショー」が行われました。

現地開催が復活した2023年度の国際大会。

世界の風土や文化に触れ、仲間と過ごした貴重な体験を報告



原口亮治理数学学習推進部長（左）と寛捷彦運営委員長（右）

国際科学オリンピックは毎年、夏に世界中の代表選手が開催国に集まって行われています。日本も「数学」「化学」「生物学」「物理」「情報」「地学」「地理」の7教科・科目において、中等教育課程（高校生相当）の代表選手を派遣しています。2020～2022年の3年間は多くの国際大会がコロナ禍で中止、あるいは自国からオンラインで参加する分散開催となりました。

今夏はほとんどの教科・科目で現地開催が叶いました。その報告会は、久しぶりの再会を喜ぶ選手たちで賑やかな会になりました。

2023年国際大会結果

大会名	開催地	代表人数	成績	国別順位	参加人数	参加国・地域数
第64回国際数学オリンピック	日本/千葉	6	金メダル2名 銀メダル3名 銅メダル1名	6位	618名	112
第55回国際化学オリンピック	スイス/チューリッヒ	4	金メダル2名 銀メダル2名	7位	348名	89
第34回国際生物学オリンピック	アラブ首長国連邦/アルアイン	4	金メダル2名 銀メダル2名	9位	304名	80
第58回国際物理オリンピック	日本/東京	5	金メダル2名 銀メダル3名	8位	387名	80
第35回国際情報オリンピック	ハンガリー/セゲド	4	金メダル4名	1位	351名	87
第16回国際地学オリンピック	オンライン開催	4	銀メダル4名	9位	172名	32
第19回国際地理オリンピック	インドネシア/バンドン	4	銀メダル1名 銅メダル2名	22位	177名	45

2023年度の国際大会と日本代表選手の結果

第一部ではまず、原口亮治・JST理数学習推進部長が挨拶。続く寛捷彦・日本科学オリンピック委員会運営委員長からは、科学オリンピックの概要と本年度の日本代表選手の活躍ぶりが伝えられました。

続いて行われた参加報告では、7教科の日本代表選手各1名が次々に登壇し、国際大会の様子や感想を述べました。競技を頑張ったことはもちろん、「開催国の街並みがきれいだった」「食事が美味しかった」「開会式のパフォーマンスを日本代表選手みんなで頑張った」「日本のアニメソングを他国の代表選手たちと歌った」「持参した世界地図に90カ国の代表選手のサインをもらった」など、他国の文化に触れたり世界中の科学好きと交流したりと、充実した時間を過ごしたことが伝わってきました。

コロナ禍の日本代表選手50名超が集結！

豪華な登壇者と、科学オリンピックで得たものや進路について考える



左から齊藤颯さん、榎太一さん、五十嵐美樹さん

第二部は「国際科学オリンピックのその先へ オリンピアンたちが見据える科学の未来」と題して、2020～2022年の日本代表選手たちによるトークショーが行われました。モデレーターは、国際科学オリンピック親善大使で同志社大学ハリス理化学研究所専任研究所員・助教の榎太一さんと、国際科学オリンピック応援団で東京都市大学特任准教授の五十嵐美樹さん。さらに、元オリンピックで現在製薬会社に勤務する齊藤颯さんがゲストとして登壇し、日本代表選手たちに事前に行ったアンケートの結果を基にトークを展開しました。

最初のテーマは「国際科学オリンピックを目指した理由」。結果は「科学が好きだから」が最も多く、「自分の実力を試すため」「同じ趣味や志の仲間と出会えるから」と続きました。「国際科学オリンピックに参加して得たもの、感じたこと」という質問には、「仲間とディスカッションしたことが刺激になった」「後輩の代表選手をサポートする“チューター”になることができ、充実していた」といった回答があり、仲間や先輩・後輩との交流を大事に感じている選手が多いことがわかりました。



また、参加した国際大会がコロナ禍によりオンラインでの開催になったことについては、「地学では、国内で調査をする代替プログラムがあり、むしろ日本のことを知るきっかけになった」と前向きに捉える選手がいたのが印象的でした。その一方で、「コロナ禍前後で考え方や進路は変わったか」という質問に対し、ある選手はコロナ禍で社会が混乱する様子を目の当たりにし、どうしたら科学を正しく伝えられるかという問題意識が芽生え、それを実行することの難しさを日々感じていたと振り返りました。

5つ目の質問の「今後、自分の科学の能力をどのような課題解決に役立てたいか」では、「宇宙における人類の生活圏を増やす」という選手の大きな夢に会場が大いに沸きました。その他、「医学研究者となって病気を解明したい」「10年後に自分がどんな課題に取り組んでいるかを予測するのは難しい」など現代が抱える問題の難しさに言及する回答もありました。



「現時点で、将来就きたい職業は何か」という質問では、半数が「まだ決まっていない」としながらも、起業を目指してアメリカの大学に進学したり、地域の課題解決を考えるには自然科学だけでなく人文科学や社会科学も大事だ



と感じて法学部に進学し、将来は自治体の首長になりたいと考えていたりする選手がいました。また、多様な世界を見てきた登壇者の3人からは、「アカデミアでも企業でも、各世界にはそれぞれ特長があるから、あまり縛られずに行ったり来たりしてみるのもいいかもしれない」というアドバイスがありました。将来に悩んでいた選手には、多くのヒントが得られたことでしょう。

選手たちから登壇者へ質問が投げかけられる場面もありました。「学術研究は社会における有用性をどの程度考慮しなければならないか」という問いには自身も研究者として日々活動している五十嵐さんが、「サイエンスコミュニケーションに関して正確性とわかりやすさの折り合いはどうつけるべきか」という問いにはテレビでも活躍している榎さんが、「国際科学オリンピックで培った能力はどのように役立つ可能性があるか?」という問いには元オリンピックの齊藤さんがそれぞれ回答しました。





最後に、「みなさんこうして話して、日本の未来は明るいと感じられました」（齊藤さん）、「今、科学を面白い、楽しいと思っているみなさんには、感情が動いたことで生まれたこの気持ちを忘れないでほしい」（五十嵐さん）と感想を述べた2人。そして、榎さんが「これからは、みなさんがつくっていく時代。誰かに言われたからではなく、自分たちが日本をどうしていきたいか」と

いう意識を持ってほしい。そのために科学はどうあるべきかを考えながら、自由な発想で進んでいってください」と締めくくると、会場には大きな拍手が起こりました。



イベントに参加したメンバー全員での記念撮影